わだつみのこえ記念館
記念館だより
Museum Wadatsuminokoe Newsletter
No. 1
2007. 8. 14

平和への発信基地
戦没青年との対話の館開く

「わだつみのこえ」をいかに聴き、戦没学生の遺念をどう受けとめて、平和をつくる営みにつなげるか……。彼らの遺稿とともに、彼らの心の軌跡を偲ぶ手記や遺品、そしてアジア・太平洋戦争を遂行したこの国における広汎な民衆のさまざまな体験、また侵略され犠牲となった国ぐにの民衆の体験を伝承する資料を併せ読むことによって、歴史のより大きな文脈のなかで、彼らを見舞った悲劇の実態と本質を明らかにしたい――わだつみのこえ記念館の山下肇館長は開館のあいさつでこう述べた。

二〇〇六年十二月一日午前十一時過ぎ、海をイメージさせる濃紺の二階フロアへと階段から続く小さな空間に純白のテープが張られ、山下館長のほか、手塚久四わだつみ会理事長、永野仁わだつみ記念館基金（NPO法人）理事長によって鋏が入れられ、その場に集った戦没学生の遺族、わだつみ会会員など約四〇名の拍手のなかに開館の式典が挙行された。

「学徒出陣」五〇周年（一九九三年）の五月に、わだつみ会創設以来の宿願である戦没学生記念館の建設運動を会が呼びかけて、それから十三年余りを経てこの日を迎えた。この間に、建設委員会・募金委員会も組織して会の総力をあげて取り組むことにより、会内外の熱い期待と千四百名以上の方々の拠金が寄せられ、数次にわたって候補地を検討した。一九九四年十二月には「わだつみ記念室」との呼称による準備室を事務所に付設して、遺稿・遺品の受託と資料収集に着手し、二〇〇五年八月には特定非営利活動法人わだつみ記念館基金（所轄庁・東京都）を設立して、記念館の運営主体を定めた。

そして、同年秋以来候補となっていた現在地（赤門アビタシオン内一・二階接続二室延べ一〇二・三㎡）を詳細に検討して購入を決定し、昨年九月十三日所有権移転登記によりこれを取得した。香山壽夫建築研究所の紹介を受けて進藤圭介建築研究所に改修工事の設計・監理を委嘱し、㈱アクティブの施工により、同年十月二日着工した。進藤圭介氏のリーダーシップにより、設計について田村隆雄氏、デザインについて川畑博哉氏、ディスプレイについて吉村親義氏、また、展示企画・監修について山辺昌彦氏（元・立命館大学国際平和ミュージアム学芸員）各氏の熱意のこもった協力を得て、十一月十五日に工事を完了し、ここに「わだつみのこえ記念館」施設が完成した。

開館当日午後には文部省共済宿舎「フォレスト本郷」内レストランで祝賀レセプションが催された。記念館に遺稿遺品を寄託された遺族の方々をはじめ、建設運動と施設工事に関わった方々、報道関係者などをお招きし、山下館長夫妻をはじめ会員と縁故者約五〇名の参加を得て、大島孝一わだつみ会理事の乾杯の発声に唱和して開館を祝い、こもごも祝辞をいただいた。

撮影／津布久 智

運営主体は「わだつみ記念館基金」

開館した「わだつみのこえ記念館」は、二〇〇五年八月三日に設立された「特定非営利法人わだつみ記念館基金」によって運営される。この法人は、特定非営利活動促進法（平成十年三月二五日法律第七号）により法人格を与えられた社団で、東京都知事を所轄庁として登記されている。記念館設立にいたる呼びかけと建設運動、拠金活動を推進してきたのは日本戦没学生記念会（わだつみ会）であるが、わだつみ会はいわゆる法律上は「人格なき社団」とされる任意団体で、団体の名で法律行為をすることができないので、記念館の施設を保全し、寄託された戦没者の遺稿・遺品をはじめ、収集される貴重な資料を保管し、研究・展示のためにこれを利用することを主目的とする法人を設立して、わだつみ会はこれまでの活動の成果をこの法人「わだつみ記念館基金」に引き継いだのである。

法人格を得た「基金」は法律上の権利義務の主体と認められ、契約を締結する当事者となり得、不動産所有についても「基金」名義で登記ができるので、記念館の運営について社会的信頼性を確保し、永続性を保証することが出来るようになった。

「わだつみのこえ記念館」はこうして、一九五〇年創立以来の「わだつみ会」の理念である「戦争を体験した世代とその体験をもたない世代との交流、協力を通して戦争責任を問い続け、平和に寄与する」趣旨をにない、「広く一般市民を対象として、徴兵・学徒出陣・特攻等の戦争の事実の伝承と、戦地・内地・疎開・空襲等の戦争体験の継承に関する資料を収集して展示して、戦争の悲劇と平和の大切さを訴え、平和の推進と国際交流と社会教育の推進に寄与することを目的とする」（「基金」定款第三条）特定非営利活動法人により運営される。もちろん、わだつみ会は今後もこの記念館を支える中心となって活動をつづける。

俳句吟行　わだつみのこえ記念館にて

厚着の俺と目が合う童顔の戦闘帽　石川　貞夫
梅明りハングルの遺書学徒兵　田中千恵子
冬怒涛ここわだつみ館より痩せて出る　望月よし江
薄氷や死亡告知書透けるごと　竹内たかし
目から背の凍てし学徒の声の染み　飯田　史朗
戦死公報あれば開けと冬の遺書　樋口　素秋
春咲かぬ遺書に気宇なき連ね文字　今関　民雄
わだつみよ動けば寒い遺書の列　松村　嵐山
全滅・玉砕わだつみ館の背すじの寒　宇津木丈夫
妻の名を呼ぶと秘めたり死出の時　小泉　峯子

二〇〇七年一月二九日
新俳句人連盟東京（二三区）支部吟行句会

来館者の「感想ノート」より

朝日新聞十一月二八日付けの記事を見て「やっと念願の館が開館するのだ！　良かったこと」と喜びました。早速に足を運んで拝見致しました。青年たちの声無き声が手紙やハガキ・日記からにじみ出てきます。各地にそれぞれ思いがこもった館がありますが、赤門前のこの一室からのメッセージを多くの方に訪れ聴いてほしいです。（七三歳女性、茅ヶ崎市、06・12・4）

◉

若い優秀な方々の哲学的なご意見思想等々拝見され、素晴らしい人達を失ってしまったと悲しくなります。この方達が戦後を生きて社会の為に働いて下さったら日本も良い国になっていた事と惜しまれてなりません。皆さん向学心に燃え、これからもっともっと勉強したいと思っていながら心ならずも戦争に征かねばならず、さぞ残念だった事と思われます。心からご冥福をお祈り申し上げます。（八〇歳、06・12・4）

◉

権力政治に翻弄されているとわかっていながらも戦地に向かっていかざるを得なかった若者たちがいたことを知り、驚くとともに、非常に沈痛な気持ちになりました。また、戦後もずっと、戦争準備と見える政治、社会情勢であったということを知り、驚きました。ここ数年のうごきではなく、脈々と続いているということに。この動きを止めねばならないと切に感じています。（最近の教育基本法「改正」の動きに強い危機感を持っている一学生、06・12・11）

◉

宇田川達氏の妻邦子さんへの遺書、せつせつと愛情がしみ出す文に心が打たれました。

ＮＨＫのニュースで見て、東京に来た際にはうかがおうと思っていました。思ったより小じんまりとしていますが、一つ一つに愛情を感じることができました（内容にも、展示にも）。（四一歳男性、和歌山市、06・12・11）

◉

とても自分と同じ年代の人が書いている日記とは思えませんでした。展示を見たことで、今の自分はまだまだ未熟だなと思うと同時に、自分がその時代に生まれていたらどういう心境で日々を過ごすのだろうと想像すると鳥肌が立ちました。（一九歳男子学生、世田谷区、06・12・11）

◉

用事で関西から上京する機会があり、関東の友人にこちらのことを聞き、今日伺いました。学徒出陣という言葉の定義すらあまり明確に認識できていなかったのですが、やっとその意味がわかりました。これはとても恥ずかしいと思いましたが、今後『わだつみのこえ』などを読んで歴史認識をきちんと持たねばならないと感じました。これらの手記に愛国心の記述をちらほらと拝見しましたが、愛国心教育論と重なるような気がして怖いです。（二三歳学生、06・12・15）

◉

昨年、大学の卒業論文で佐々木八郎、上原良司、宅嶋徳光らの手記を引用しました。活字化され、製本された遺稿集です。今日、ここへ来て初めて佐々木八郎、宅嶋徳光の直筆を見ました。

生の文字ほど訴えかけるものはないでしょう。六〇年以上も前に彼らが書いたもの。手で触れ、ページをめくり、ペンを走らせた彼らの姿が目に浮かび、より一層身近に感じることができたと思います。（二三歳女子学生、06・12・18）

◉

海軍兵学校七八期（予科）終了で終戦を迎えた者です。二階展示室で遺書を見ながら当時の若い学生達の苦しみを察するに余りある気持です。それに比べて終戦時15歳だった自分が77歳の喜寿になり、無為に生きてきた自分を反省し、申し訳ない気持で一杯です。あと何年生きられるかわかりませんが、今日の見学を忘れずに生きていきたいと思います。有難うございました。（七七歳男性、いわき市、06・12・18）

撮影／津布久 智

◉

学徒出陣の年、自分は十二歳、あと十年早く生まれていたなら、同じ戦場にかり出されていたであろう。さぞや無念であったろう。六〇年たつと人間は馬鹿なもので、又同じことをくり返すのだ。彼等はそんな日本に夢を託して死んだのではない。死を無駄にしてはいけない。それにしても当時の両親、家族に対する思いは日本の最高の美徳だ。今どこへ行ったのだろう。（男性、06・12・20）

◉

私には、今年春から大学生になる息子がいます。私自身戦争を体験していませんし、身近な人にも聞いていません。ですから「遠い話」だと感じていましたが、展示されている方は二〇歳前後の方達で、私の子供と重ねて考えさせられました。母親として、笑顔で見送らなければいけなかったその時代に生まれなくて良かったとつくづく思いました。いろんな経験をいっぱいできるはずだった若い生命を散らせなければならなかった時代がとても辛いですが、この方達のおかげで今の私達があるのだという事を息子に伝えきれるか――自信がないです。（三九歳女性、07・1・17）

◉

二〇歳をわずかばかり過ぎた、みずみずしい心をもった青年たちが、狂気の戦争の渦の中にのみこまれ、必死にもがき苦しんだときに、こぼれた〝ことば〟は胸をえぐります。

このような狂気を二度と生み出さない為にも、この方々の苦しみ、この方々のうめき声、こぼれ落ちることばを風化させてはなりません。

あやまちを二度とくりかえさぬ決意が、最も正しい慰霊のあり方だと信じます。関係者の方々、本当にご苦労様です。（五四歳男性、07・1・17）

◉

長野県出身の林尹夫さんのノートに「権力政治家が国民指導の教師となり、服従せざる者を弾圧するならば、国家の末路は火をみるより明らかである。」と記されている。

教育基本法改悪、君が代・日の丸強制……。いまの日本の状況をずばり指摘している。生き残った者の最大の責務は、いまの日本国憲法を守りきることだと思う。（六八歳男性、東久留米市、07・1・17）

◉

わだつみのこえ記念館の設立にお骨折下さいました方々に心より感謝致します。東大構内には日が指し、今の学徒の幸せを思いつつ、はや日の陰ってしまった本郷通りの歩道を歩んで参りました。無法松の一生の映画の感想、賢治の詩の引用など誰

方のものにも胸打たれました。

また、私は短歌をたしなむ者として、学徒の方達が作歌しておられることにも心打たれました。若い時、師と仰ぎました田谷鋭先生の短歌にも（『多摩』）眼にすることが出来、嬉しく思いました。今も戦争が起っており、多くの方々に来館して頂きたいと存じます。（七九歳女性、07・2・16）

◉

先日、鹿児島・知覧の「知覧特攻平和会館」に旅行会社のツアーで出かけました。同じ戦没者・学生を扱った所であり、「平和祈念」を主眼とした所ではあっても、彼我の違いの大きさ、訴える方向の違いを痛感しました。

知覧では、散っていった若者をたたえ、いったん国難に遭った時は「現在の君達もそれをして欲しい」と言わんばかりの設置（者）側の意図が見えかくれしていました。亡くなった人達の苦悩の姿はほとんど見せていませんでした。

この「わだつみ館」は、死ぬために今生きていることの意味、例え死しても己の自由の精神は残る、人間の自由の心情こそ尊いと訴えているように見うけられます。旧作の（映画）「きけ、わだつみの声」に出演なさった知人からはいろいろ話を聞いています。

憲法が、九条があぶない昨今、再び若者を無意味な戦に立たせることのないよう、戦没学徒の声・心情を広めたく思います。明三月三日のフォーラムに参加出来ないのが残念です。（六九歳女性、07・3・2）

◉

「俺は生きて帰る」「俺の人生は山ほどある」……若き学徒の痛切な叫びに心打たれる。また自由、愛を大らかに表明する人間性、理性に当時の状況の中での勇気に驚かされる。同世代の私（特幹くずれ、訓練中に敗戦）と比較して恥ずかしく思います。今、戦争遺跡の保存で罪滅ぼし中。（男性、07・3・7）

◉

直筆の日記が多く展示されていることにびっくりするとともに、そのいずれもが几帳面で細かな字でびっしり埋まっていることに驚きました。将来を担うべき優秀な学生達が戦場に送られ尊い命が奪われたことに憤りを感じるとともに、このようなことを二度と起こしてはならないと強く感じました。戦争を体験した人達が少なくなり始めたこの時期に、悲惨なできごとのあったことを後世に正しく伝えることの大切さを痛感しました。（五八歳男性、07・3・16）

零墨

「僕は初め、このこと（出征）が決まった時、今まで交渉のあった人々、恩顧をうけた人々に対し、それぞれの人あてに遺言を書こうと思った。……

僕は今は遺言を書くまい。ただ、今まで恩顧をうけた人々がそれぞれにそれぞれの道を真っすぐに進んで、それぞれの天命を全うされんことを望むのみである。すべては大いなる天の解決する所、各人が世界史の審判に何の恐るる所なく直面せられん事を望むのみである。……

これをもってこの日記を閉ずることとする。昭和十八年十二月九日午前二時四十分」

横須賀の海軍武山海兵団に明日入団、というその夕に書きはじめて深更に擱筆した学徒、佐々木八郎の遺稿には「無限の想いを有限の紙上に尽さんとする愚を敢えてすまい」との痛切な自制を読みとることができる。

その三年前（太平洋戦争勃発直後）の日記には次のように記されていたことを思い起すとき、彼の苦悩とその末の達観、そして同胞への深い愛をしみじみと感ずる。

「現在、皇恩の下にこの帝国に生活して豊かに生きることのできる僕は、御召しとあれば赴くことを否むものではないし、戦争などに押しつぶされるほど弱い心ではないつもりだ。しかし、僕は断固として反戦論者として自らを主張する。」（昭和十六年十二月十五日）

また、太平洋戦争の緒戦の「戦勝」に沸く世上への観察を記して、「戦争に行くことを拒絶する者を無理やりに連れて行って、残酷な訓練をして、遂に殺すことは非人道的ではないのか」（昭和十七年一月十四日）とも書き、「シンガポール陥落」の記事には次の一首を添え書きしていた。

「このいくさ何の戦と知らずして戦ふ人を思ふ苦しさ」（昭和十七年二月十日）

（寧）

◉

本日は東京大学の第何回目の卒業式になるのでしょうか？　昨年十二月、この記念館が開館されたことを知り、是非お訪ねしたいと念じておりましたことが実現出来て、それが生協運動の中で平和を願う人々と共に、――よかったです。

「天上大風」の碑が東大正門前に建てられ、その近くにこの記念館が関係者の御盡力で実現出来てよかったです。

展示の中で朝鮮籍の方々まで戦場で、そして日本の憲兵によって命を落とされたことを知り、何とも申しわけないことであると、より悲しみが増したのでありました。

東京陸軍幼年学校第四五期、最後の「東幼生」であった夫とともに、この記念館を訪問させていただけたらなお良かったのに。本日は夫の分も含めて追悼の気持ちを記させていただきます。（女性、07・3・23）

◉

どの手記や手紙もせつせつと訴えるもので、人間としての本当の気持ちがあらわれている。このような優秀な前途ある青年たちの生命を奪った戦争の悲惨さを思うとやりきれない。ご家族の思いはどんなだったでしょう。現在を生きる私たちが彼らの声の何をひきつぎ、次世代につなげなければならないのか――しっかりと受けとめ、彼らの分まで一所懸命に生きなければならないと思う。館運営は大変だと思いますが継続してほしいと願わずにはいられない。（五〇歳男性、07・5・11）

◉

「わだつみのこえ」を今こそ全国民に聞かせたいと強く思いました。信州の「無言館」の展示画と同様、本記念館の手紙類も「こえなき声」にしないことが残された私どものつとめの様に思います。憲法九条は、そして現憲法は、世界に誇れるものと信じます。

映画「きけ、わだつみの声」を東大二五番教室で観ましたが、今もなお強烈な印象を受けたことを憶えています。本記念館は本郷通りを歩いていて、ふと目にとまりましたが、どうぞ広く知らせていただければと強く思います。記念館運営にたずさわっていらっしゃる皆さまに厚くお礼申し上げます。（女性、07・5・21）

◉

戦後六〇年の平和の歩みの礎がここにあることを知らされました。二三、二四歳で散っていった多数の優秀な学生たちの生の姿に接した心地がして、一人一人の人生の重さを感じました。重圧をもって我々に迫ってきました。我々の生き方を問う力になっています。濃いマリンブルーのじゅうたんと障子戸から照らし出されるライトブルーの（パネルの）色彩の対比があざやかでした。（設計者の）色彩感覚のすばらしさがよく表れています。海底に沈んだ魂が生きかえってここで声を発しているようでした。歴史証言の貴重な場所と感じました。大学の前にあることも貴重ですね。有難うございました。（五七歳男性、07・6・20）

「わだつみのこえ」を平和へつなぐ
記念館を維持するためのお願い

わだつみのこえ記念館　館長　山下　肇
特定非営利活動法人わだつみ記念館基金　理事長　永野　仁

「わだつみのこえ記念館」は、アジア・太平洋戦争における日本の戦没学生を中心に、彼我あらゆる戦争犠牲者にかんする資料（遺稿・遺品などの原資料、活字・映像・音声資料その他）を広く収集して公開しています。「わだつみの悲劇をくりかえさない」誓いを後世に伝えていく施設として、常設展示のほか、特別企画展示をおこなっています。

この記念館は、日本戦没学生記念会（わだつみ会）の呼びかけに応えられた1,400名以上の方々の拠金と、寄託された貴重な資料を基として、2006年12月１日に開設されましたが、この施設を保全・管理し、今後も寄託・収集される資料を永久に保存し公開していく「わだつみのこえ記念館」の事業に対しましても、「維持会員」もしくは「賛助会員」として、志を同じくする皆さまのご協力を心からお願いいたします。会費を納入して会員となってくださった方には、当記念館の事業活動をご報告する「記念館だより」をはじめ、「わだつみフォーラム」等の主催行事のご案内をお送りして、当館とのコミュニケーションをお願いいたしたく存じます。

「わだつみのこえ」を平和へつなぐ、わだつみのこえ記念館に倍旧のご支持とご支援をお願いいたします。

◆わだつみのこえ記念館　維持会員　　年額　　2,000 円

・更新は毎年３月末を中心にお願いしますが、ご都合のよい時期に年会費をお納めください。

◆わだつみ記念館基金　　賛助会員　　１口　　10,000 円（１口から何口でも）

わだつみのこえ記念館の事業

■アジア・太平洋戦争における日本の戦没学生を中心に、彼我の戦争犠牲者に関する資料（遺稿・遺品などの原資料、活字・映像・音声資料その他）を広く収集します。

■戦争体験の真の意味を理解し、これを継承するために、戦争に動員された民衆に関する資料（戦場体験、勤労動員・「銃後」文化など）、植民地・占領地の民衆に関する資料、また、戦争遂行と戦争責任に関する資料を国内・国外を問わず広く収集します。

■資料を系統的に保存するとともに、市民の研究上の利用のために公開し、資料検索情報の集積、共同研究の機会の提供、また研究成果の刊行などにも積極的に取組みます。

■「わだつみの悲劇を繰り返さない」誓いを後世に伝えていく教育の場として、常設展示を行い、また、テーマを掲げる特別展示や、映写会・講演会などを企画・実行します。

短　信

◆（わ）若き顔
（だ）黙りて書した
（つ）積もる想い
（み）観るものは皆
（の）退き去りがたく
（こ）心に誓う
（え）永久平和

記念館 あつき心の 集まりて
わだつみのこえ いまここに成る
（手塚久四）

◆開館を祝して、韓国の「一・二〇同志会」（韓国人学徒兵で生還した人々により一九六二年結成。入営日に因む会名）の許相燾氏より短歌の揮毫をいただいた。短歌は次の通り。

わだつみよ　恨み晴らして　眠れかし　いくさなき世の　花を褥に

◆一般公開された十二月四日からの来館者数は、年末までが三七〇名、一月一二二名、二月九五名、三月一一六名、四月六九名、五月一〇六名、六月九三名、七月五五名。七月末までの累計では一千二六名。ほとんどの来館者が「来館者感想ノート」を記されており、本紙に紹介したのはそのほんの一部である。

◆開館に際し作成した案内リーフレットに記されている通り、五名以上のグループで来館される場合には、事前の予約を受けて、解説・案内者を特別に用意したり、例外的措置として、通常の開館日以外にも来館者を迎えたりしている。

◆記念館一階の閲覧スペースを使って、二回にわたり「わだつみフォーラム」を催した。三月三日（第一回）には、高橋武智氏（リュブリャナ大学客員教授）の講演「スロベニアを通してみた戦争と平和」。次いで四月二一日（第二回）には、雪山伸一氏（元・朝日新聞記者）の講演「東独市民にとってのドイツ統一―監視国家の後遺症はいまも」。いずれも約二〇名の参加を得た。高橋氏の講演記録はわだつみ会機関誌一二六号に収録、雪山氏のものは次号に収録予定。次回の「わだつみフォーラム」は十月中旬を予定している。

◆記念館が入居しているマンション「赤門アビタシオン」の管理組合によって、六月末より外装改修工事など大規模修繕工事が行なわれており、工事完了は十月末が予定されている。この間、廊下などビル内部の共用部分塗装工事などのため、入館時にはご注意ください。

◆記念館を運営する「わだつみ記念館基金」の現役員は次の通り。理事長永野仁、副理事長小島晋治・手塚久四、理事石井茂・石井力・井室美代子・中條雅夫、常務理事渡辺總子・岡安茂祐、監事別府榮典・清宮誠、わだつみのこえ記念館館長山下肇。また、記念館運営のスタッフとして、学芸員の山辺昌彦氏、司書の二瓶治代氏、受付・応接・事務には井室・中條・渡辺各理事、ボランティアとして、稲葉さん、内田さん、小川さん、奥田さん、鈴木さんに加わっていただいている。

わだつみのこえ記念館
記念館だより　第1号
発行日　2007年8月14日
発行者　わだつみのこえ記念館
館長　山下　肇
東京都文京区本郷5-29-13
(〒113-0033)赤門アビタシオン1階
電話／Fax 03-3815-8571
E-mail wadatsuminokoe@nifty.com
URL http://wadatsuminokoe.lookscool.com/
郵便振替00180-3-612451